

日本語の複合名詞による認識のタイプ

嶋 田 裕 司

Cognitive Types in Japanese Compound Nouns

Hiroshi SHIMADA

1. はじめに

人が単純語のみならず複合語を用いるのはなぜなのか。複合語が造られ理解されるとき何が起きているのか。本稿では、この二つの問いに対する答えを求めて、日本語の複合名詞を考察する。最初の問いを動機の問題、第2の問いを構造の問題と呼ぶと、本稿では構造の問題を通して動機の問題に迫ることになる。

構造の問題に関わる要素は少なくとも三つある。複合語を発音するとき初めに現れる語を前項、次に現れる語を後項と呼ぶと、構造の問題は、複合名詞とその前項と後項の意味関係はどのようになっているのかと表現できる。その答えは、「赤ワイン」「紙袋」などを見る限りでは自明のこのように見える。すなわち、「赤ワイン」の例では、前項「赤」が下位類を指定する印であり、後項「ワイン」が元の類を表わし、複合語全体としては後項の下位類を表わしている。構造に関するこの説明は、また、動機の問題に対する答えと解釈することができる。つまり、複合名詞を用いる動機は、類に基づいて下位類を設定することにある。このように、構造と動機の問題は表裏一体のものである。

しかし、すべての複合名詞において下位類の設定が行なわれているわけではない。下位類という用語の意味を、元の類に更にある種の性質を加えた部分集合と解釈すると、たとえば、「柱」と「火柱」、「牛」と「うみうし（海牛）」の関係は、類とその下位類とは言い難い。赤ワインはワインの一種であると言うのと同じくらい自信をもって、火柱は柱の一種であると言うことはできないであろう。牛がいると言いながら海牛を指差せば、冗談と思われるかもしれない。それでは、複合化は、下位類の設定以外にどのような働きをしているのであろうか。一般に、既知の物の知識に結びつけて新たなものの類に名前を与え、そのものを理解することが、複合名詞を用いる動機である。下位類の設定は、その働きの一つであり、本稿では、その他に隣接類の設定、部分や位置の指定、物の具象化の働きがあることを記述する。

本稿では、構造の問題を物の認識の問題と見なす。前項と後項の意味関係がどのようなになっているのかではなく、新たなものの類を認識するとき前項と後項がどのような概念上の操作を受けて、その認識を構成するのかという問題が、構造の問題である。動機に応じて構造も異なる。第3節では、認識のタイプごとにその構造を記述する。最初に、複合語とその後項の意味関係、および前項の果たす役割を観察することにより、下位類と隣接類の認識のタイプについて述べる。これらは、後項の身体性が複合語に受け継がれた類として一般化できることを確かめる。次に、物の存在領域の変更による理解を表すタイプ、さらに、イメージの重合による部分・位置の指定と物の具象化の二つのタイプについて記述する。

2. 先行研究

本節では、まず本稿で考察する複合名詞の範囲を明らかにし、次にそれに関連する英語と日本語の複合名詞の研究に触れ、考察に必要な意味分析に関する態度について述べる。

考察の範囲は、二つの名詞からなる複合名詞であり、要素となる名詞を動詞からの派生形として論じることではない。複合語は、それを構成する要素自体の構造によって一次複合語と二次複合語に分けることができる。一次複合語とは、二つの要素がともに単純語であるものであり、二次複合語とは、要素として派生語または複合語を含むものである。¹ 複合名詞に関しては、二次複合語のうち特に動詞から派生した要素を含むものが近年盛んに研究されてきた。これは、動詞が文法関係あるいは項関係を示すために、他の語との結合の可能性を文または語句の内部で論ずることが容易であるからである。それに対して、一次複合語は、その内部に動詞の項関係を持たないため、二つの要素の関係はある程度分類されるにとどまっていた。本稿で考察する複合名詞は、主に一次複合語である。しかし、範囲の設定には、一次か二次かによる区分ではなく、要素に動詞を含むか否かが関わっている。すなわち、考察の範囲は、前項と後項を動詞からの派生とは見なさない複合名詞である。

複合名詞の分類は、要素間関係に基づいて古くから行なわれてきた。しかし、二つの単純名詞からなる複合語に限っても、要素となる二つの名詞の意味関係は、多様であり、しかも正確にとらえるのが困難であるため、十分に分類することが不可能であることが繰り返し指摘されてきた。²

また、初期の生成文法理論の枠組みにおいては、二つの名詞からなる複合名詞が文または句から文法規則によって派生するという考えに基づく研究がなされた。この考えによれば、たとえば、‘apple cake’は‘cake that has apples’から、‘silkworm’は‘worm that makes silk’から派生する。日本語の例では、「春風」は「春に吹く風」から、「朝酒」は「朝飲む酒」から派生する。しかし、この試みの限界はDowning (1977) によって指摘されている。基底構造が複合名詞の意味を表示するという仮定の下では、一次複合語の多様な意味をすべて基底構造で表示することが必要になり、しかも削除変形の復元可能性を保証するためには、基底構造が無制限に多様であることは許されない。この二つの条件を同時に満たして、しかも興味深い分析を行なうことは困難である。変形によって削除される要素の数を少なく仮定すると、基底の意味構造を十分に表示できず、逆に、意味を詳しく表示する構造を仮定すると、削除規則が多様になりすぎ、復元可能性の条件が満たされなくなる。³

意味関係による分類においても、基底表示からの派生の試みにおいても考慮されなかったことは、要素となる語の意味の内部構造である。それらの研究においては、前項と後項のそれぞれの意味を分析することなしに、その関係を指定したり、説明的な語句を加えて言い換えることを行なっていた。複合語について知るためには、その要素となる単純語の意味を分析する必要はないという暗黙の前提を受け入れている点に、複合名詞の下位分類と変形規則による派生の分析の限界がある。

複合語全体の意味と要素の意味の関係を、要素の意味を分析することによって考察したのは、Lakoff (1987: 74-84) である。彼は、英語の単純語 ‘mother’ の意味を誕生・遺伝・養育・結婚・家系に関する五つのモデルの複合体と見なし、‘stepmother’、‘foster mother’、‘adoptive mother’ などの複合形の意味を、‘mother’ から逸脱したものとして記述している。たとえば、ある人の ‘stepmother’ は、〈生んだり遺伝物質を与えたりはしなかったが、その人の父と現在結婚している女性〉であるので、養育・結婚・家系については ‘mother’ と同じであるが、誕生・遺伝に関しては ‘mother’ と異なることになる。また、‘foster mother’ は、〈その子を産んだのではないが、公式に養育する女性〉のことであるので、単純語 ‘mother’ の五つのモデルのうち養育モデルのみを選択して、部分的修正を加えた意味を持つ。このような例では、複合形ごとに ‘mother’ の意味の中のどれが関与するのか異なっている。Lakoff は、複合形の意味の指定には、単純語の意味の全てが関わるのではないこと、および、単純形と複合形の意味関係は個別に学ぶしかなく、一般的規則で予測することはできない点を強調する。

複合語の意味と使用法を理解するためには、単純語の意味の分析が不可欠であることは、篠木 (1996a, 1996b, 1997) も示している。Lakoff (1987) が人間関係を表わす語 ‘mother’ を扱ったのに対して、篠木 (1996b) は具体物を表わす「モチ (餅)」を分析している。人が餅を搗いて食べるまでには幾つもの段階があり、また、餅にも典型的なものから周辺的なものまである。どの段階でどのような名称で呼ぶのか、また、何に着目して複合形を用いるのかを考察する際に関与することとしては、材料の種類と状態、加熱動作の種類、混交物、添加物、二次加工動作などがある。単純語「モチ」は、くもち米の粒を蒸して搗いたものゝを表わすが、複合語「アワモチ」「コナモチ」「ユデモチ」「マメモチ」「キナコモチ」「ノシモチ」は上記のそれぞれの点に関する有標形である。たとえば、「アワモチ」は材料にもち米の他に粟が加わったもの、「キナコモチ」は出来た餅に黄な粉をまぶしたものである。「ノシモチ」は出来上がった餅をさらに伸して二次加工したものである。前項「アワ」「キナコ」「ノシ」が複合語の中で受ける解釈は、餅の造り方の知識に依存している。前項は、製造過程のどの段階でどのような変更を加えるのかを示す標識となっている。ここでも、複合語の意味は、要素となる単純語の意味を分析することによって記述されている。

篠木による複合語の研究が示すもう一つの重要な点は、Langacker (1987: 154), Taylor (1989: 81ff) が主張しているように、具体物の意味記述に際して言語的知識と百科事典的知識の区別をしないことである。人が現実世界で生きる際にどのような場合に、何に着目して、複合形を造るのかという問題を取り上げると、ある物事に関する知識をこの二つに分けてから研究を始めることには意味が無い。物の名前の複合化には、物に関する知識の様々な面に関わる可能性がある。本稿における語の意味記述においても、言語的知識と百科事典的知識の区別は行なわない。ここでの問題は、意味論と語用論の区別ではなく、物の知識のうちのどの面がどの様に複合化に関わるのかということである。

3. 複合名詞による認識のありよう

さて、複合名詞とその要素となる名詞の意味関係の分析に入ろう。対象とする複合名詞は、主に「柱」「波」「鏡」「海」「首」「底」などの恐らく基本レベル類を表わす名詞を要素とするものである。⁴ 本稿の目的は認識のタイプを明らかにすることにあるので、考察の対象は代表的な例にとどまり、網羅的に考察を行なう余裕はない。タイプの記述には、イメージや領域の変更など、言語の比喩的側面の研究で用いられてきた概念に依存する部分がある。⁵ なお、以下では複合名詞を単に複合語と呼ぶことがある。

3.1. 「床柱」「火柱」タイプ：身体性の保持

3.1.1. 複合語とその後項の意味関係

複合語の構成を考える上で、複合語全体とその後項の関係は最も重要であると思われる。最初に、その二つの意味上の関係について考えることから始めよう。

まず、「柱」とそれを後項とする複合語を例にして、複合語と後項の関係について考えよう。初めに、普通の家屋にある典型的な柱についての知識を記述すると、おおよそ次のようになる。

(1) 「柱」

- a. [形 状]：細長く垂直に立つ。
- b. [対応の仕方]：人は柱を背丈より高いものとして見る。
- c. [材質]：普通は材木である。
- d. [全体・部分]：家屋の一部をなす。屋根を支え、家の構造を保つ。

語の意味に関して言語的知識と語用論的知識の区別をしないので、「柱」の性質は更に詳細に記述することはできるが、ここでの議論にとっては一応これで十分である。ただし、(1)では、「柱」に関する知識を暫定的に(a)～(d)の四つに分けて日本語で表現しているが、これらは、意味素性の集合と解釈するのではなく、柱について言葉で語ったものと考え。したがって、(1)の記述自体は「柱」という語の意味表示そのものではない。語の意味の形式について明確に述べることはできないが、本稿では、「柱」などの基本レベル語の知識は、意味素性の集合体ではなく、その語が表す物として人が思い浮かべる形状のイメージを中心に、対応の仕方、材質、その他の知識が組織化されたものであると仮定する。

次に、「柱」を後項とする複合語の主なものを挙げる。

(2) 床柱、大黒柱； 電信柱、帆柱； 火柱、水柱、蚊柱； 貝柱、茶柱、霜柱

さて、複合語とその後項の意味関係の問題に取りかかろう。(2)の複合語は、単純語「柱」の性質(1 a-d)のどれを保持しているのだろうか。「床柱」と「大黒柱」は、(1)に列挙した性質をすべて保つ典型的な柱である。「電信柱」と「帆柱」は、家の一部ではなく、しかも電線や帆を支える点で、家との全体・部分の関係を失っている。「火柱」「水柱」「蚊柱」は、家との全体・部分の関係を持たず、また、材質も異常なものではあるが、細長く垂直に立ち、人の背より高いという性質は保っている。火柱が人の背丈より高く立つことは、例えば煙草を吸うためのライターの火を細長く出しても、「火柱」とは呼ばないことからわかる。「貝柱」「茶柱」「霜柱」はどうであろうか。これらは、人体に比べてはるかに小さく、「火柱」が保っていた人間との相対的關係さえ失っているように見える。これらが保っているのは、細長く垂直に立つ形状のみであろうが、「貝柱」については、細長いという性質が十分保たれているかさえ疑わしい。次の表では、「柱」の性質のうち複合語が保持すると思われる性質を○印で示す。

(3)	「床 柱」	「電信柱」	「火 柱」	「貝 柱」
a. [形 状]:	○	○	○	○
b. [対応の仕方]:	○	○	○	
c. [材 質]:	○	○		
d. [全体・部分]:	○			

ひとまず「貝柱」類は例外と見なして、これらの複合語について一般化すると、複合語は、後項の意味のうち形状と対応の仕方という二つの性質を保持するが、他の性質は失うことがあるということになる。なお、例外とした「貝柱」類については、3.3節で扱う。

次に「袋」についてもこの一般化が成り立つことを確かめよう。「袋」の典型的な性質を(4)に、「袋」を後項とする主な複合語を(5)に挙げる。ただし、(4 a-d)の記述も、(1)と同様に、意味素性の集合と仮定するのではなく、袋として人が思い浮かべる一つのイメージを中心とした知識の一部を言葉で分けて記したものと考え。

(4) 「袋」

- a. [形 状]: 口が一つで、内部と外部がある。
- b. [対応の仕方]: 人は袋の中に物を入れる。袋の口を開く、閉じる、たたむ、丸める、膨らますなど、手で取り扱う。

- c. [材 質]: 紙・布など薄く柔軟である。
 d. [用 途]: 物の保存・運搬などに用いる。

(5) ごみ袋、砂袋; 紙袋、布袋; 寝袋、手袋; 胃袋

さて、「袋」とそれを後項とする複合語の関係を調べよう。「ごみ袋」「砂袋」「紙袋」「布袋」は、「袋」の性質をすべて持ち、その上で、用途または材質が更に指定されている典型的な袋である。これに対し、「寝袋」と「手袋」は、用途に関して普通の袋とは異なっている。つまり、寝袋は携帯用の寝具であり、手袋は手を保護するためのものである。それに連れて、これらは大きさや形が特殊化しているけれども、口が一つで内部と外部があるという点では袋の形状を一応保っている。また、対応の仕方に関しては、人は寝袋に入り、手袋に手を入れる点で特殊化しているけれども、口を開けたり閉じたり畳んだりする取り扱い方は保っている。ところが、「胃袋」はこの点で異なっている。普段の生活では、食物を食べて胃袋に入れることはできるが、胃袋を手で取り扱うことはできない。つまり、対応の仕方に関する性質の多くが失われている。また、胃袋には出口もあるので形状もやや異なっている。(6)の表では、「袋」の性質のうち複合語に保持されているものを○印で示す。

(6) 「ごみ袋」「紙 袋」「寝 袋」「手 袋」「胃 袋」

- | | | | | | |
|-------------|---|---|---|---|---|
| a. [形 状]: | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| d. [対応の仕方]: | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| c. [材 質]: | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| b. [用 途]: | ○ | ○ | | | |

「胃袋」を例外とすれば(3.4節参照)、「袋」の複合語に関しても、「柱」について成り立つ一般化が当てはまる。つまり、複合語は、後項の意味のうち形状と対応の仕方に基づいて構成される。

ここで「下位類」と「隣接類」という用語の区別をしておこう。複合語は必ずしも後項の下位類を表すわけではない。全体・部分の関係や用途の性質が失われたり特殊化すると下位類とは意識されにくくなる。対応の仕方が変化すると更にこの傾向は強まる。たとえば、(7)のような下位類を指定する文脈には、元の類の性質から隔たる複合語ほど生じにくくなる。

- (7) a. 「柱の挿絵を描いてくれませんか。」
 「どんな柱の」
 「床柱／? 電信柱／? 火柱／?? 貝柱。」
 b. 「これを袋に入れておきなさい。」
 「どんな袋に？」
 「紙袋／ごみ袋／? 寝袋／? 手袋／?? 胃袋。」

また、(8)-(9)のように複合語が指示するものを後項のみの単純形で再言及する際にも、複合語が保持する性質が少なくなるほど容認度が低下する。

- (8) a. 太郎は床柱を見た。柱には傷がついていた。
 b. ? 太郎は火柱を見た。柱は屋根より高かった。
 c. ?? 太郎は貝柱を食べた。柱はおいしかった。

- (9) a. 花子は紙袋を見つけた。袋は空だった。
 b. ? 花子は手袋を見つけた。袋は机の下にあった。
 c. ?? 花子は胃袋を満たした。袋は2時間で空になった。

このことは、複合語は後項の形状と対応の仕方に基づいて造られ、それ以外の性質が受け継がれない場合には、元の類への帰属度が下がることを示している。ここで、下位類と隣接類の区別をしよう。下位類指定の文脈(7)と、元の類名による再言及の文脈(8)-(9)で用いられる複合語は、今まで通り、元の類の「下位類」を表わすと言う。一方、このような文脈で容認度が低下する複合語は、元の類の「隣接類」を表わすと言うことにする。⁶

さて次に、上の考察で「形状」と「対応の仕方」と呼んだ二つの性質の関係について考えよう。ここで形状と呼ぶことは、物に関する知識のうち、対応の仕方を含む比較的具体的な知識から抽出される視覚的イメージのことである。対応の仕方とは、物と人とが同じ空間を共有するとき、その物に対して人がとりうる関係のことである。「柱」の例に戻ると、柱と人が空間を共有するとき、つまり、人が部屋の中で柱を見ているとき、その人は柱を細長く垂直に立つものとしてのみならず、自分の背丈より高いものとして認めている。物には、形状ばかりでなく、人の体を基準にして相対的に決まる大きさがある。それに対して、人が柱と同じ空間にいない場合、例えば、ある人が写真に写っている柱を見ているとき、あるいは、目を閉じて柱を想像しているとき、柱の形状は認めるけれども、自分との相対的大きさを直接認めることはないと思われる。もし、大きさを認めるとすれば、それは、その写真に人が写っているか、想像した柱の側に自己の姿を投影することによって比較するからであろう。したがって、人が物と空間を共有するとき、すなわち人が現実空間において物を認識するとき、その物の形状と、その物に対応する仕方は分かちがたく存在するのに対して、人が写真や想像という別空間に物を認めるとき、そこに直接的に認識されるのは形状である。そこで、人が物と同じ空間にいて現実とその物と関わりを持つとき、形状とそれに対する対応の仕方が一体となったこの性質を、ここでは、物の「身体性」と呼ぶことにする。⁷ 形状とは、物の身体性から抽出された視覚的イメージということになる。^{8,9}

次に「袋」の場合について、形状と対応の仕方の関係を考えよう。袋と人が空間を共有してある種の相互作用を起こすとき、簡単に言えば、例えば人が袋に物を入れるとき、人は袋の形状を認め、袋を手で持ってその口を開き、中に物を入れる。その際、袋に対する対応の仕方(取り扱い方)は、袋の形状と大きさに依存している。つまり、袋の取り扱い方は、その形状と大きさについての知識無しには決定できない。この形状と大きさと取り扱い方に関する知識のまとまりが、袋の身体性である。取り扱い方が、形状を含めた身体性から分離不可能であるのに対して、形状は身体性から分離して認めることができる。人は写真に写っている物を袋と認めることも、目を閉じて袋を想像することもできる。このとき袋と認められる視覚的イメージには、対応の仕方と大きさが無い。このような視覚的イメージは、複合語の前項として用いられる。例えば「袋小路」は、行止りになっている小路を指し示すが、前項の「袋」が複合語に与えているのは袋の形状のイメージであり、人との関係によって決まる大きさや取り扱い方ではない。

「柱」と「袋」の例によって、人が物に対するとき、対応の仕方が形状と分かちがたく認識されていることを見てきた。人は物に出合うとき、その形状、自分と比べたときの大きさ、対応の仕方を一体のものとして認めている。物に関するこの一体となった情報を、物の身体性と呼ぶことにする。身体性は、人が実際に物と出合って身体を通してその物に認めた性質であるのに対して、形状は、物の身体性から抽出したイメージである。

身体性という用語を用いて複合語に関する一般化を述べ直すと、複合語は、後項の意味のうち身

体性に基づいて構成されることがなる。

以上で、複合語は後項の身体性を受け継ぐという一般化に到ったことになる。このことを、人が単純語から複合語を造る過程として述べ直してみよう。人は、新たな物に出会ったとき、その物を身体性に基づいて別の類の下位類または隣接類と認識する。複合語による命名は、その関係を後項と複合語全体の関係として表現の中に記録する働きをしている。

3.1.2. 前項と後項の意味関係

次に、前項が果たす役割を明らかにしよう。上では、後項が身体性を複合語に与えることを見た。それに対して、本節では、前項が語の意味から身体性を除いた情報を複合語に与えて下位類・隣接類の標識となることを見る。

ここでは「波」「鏡」「畳」「花」の例を用いるが、比較するために、最初に、これらが後項となっている複合語「人波」「水鏡」「石畳」「火花」において、後項が複合語に身体性を与えていることを見ておこう。次の表現は、そのことを示唆していると思われる。

- (10) a. 人波にもまれた。(波にもまれた。)
 b. 水鏡に顔をうつした。(鏡に顔をうつした。)
 c. その坂道には石畳が敷かれていた。(畳が敷かれていた。)
 d. ハンマーで岩をたたくと火花が散った。(花が散った。)

人は大勢の人の間を歩いて、波にもまれたのと似た経験をしたとき、「人波にもまれた」と言う。このとき「波」の身体性の一部が複合形「人波」に与えられている。また、鏡に顔をうつすのと同様に、水鏡にも顔をうつす。つまり、鏡に対するのと同じように、水鏡にも身体を通して対応している。同様に、石畳で道を覆う動作は、畳で床を覆うのと同じように、「敷く」という動作の類に入れられる。「火花」の場合には、「火花が咲く」とは言わないけれども、「火花が散る」と言う点で「花」の性質を部分的に保っている。この例は、人の動作の対象ではないので上の3例ほど人との関わりが明確ではないけれども、散ること、すなわち人が現実世界で「花」と呼ぶ物に与えた性質の一つが保たれている。いずれの例においても、人間と後項の表す物との関わり方が、複合語の意味にある程度与えられている。

さて本題に戻って、「波」「鏡」「畳」「花」が複合語の前項として現れている例について考えよう。これらが複合語「波板」「鏡餅」「畳鯛」「花火」の前項になると、身体性が失われて形状の意味のみが保たれる。¹⁰ 波板は、面を波状にした板なので、板として扱うことはできるが、人が人波にもまれるように波板にもまれる体験をすることはない。すなわち、「波板」の前項の「波」は形状の意味のみを複合語に与えている。また、鏡餅は円形の鏡の形をしているが、水鏡のように姿をうつすためのものではない。畳鯛はカタクチ鯛の幼魚を漉き上げて干した食べ物であるから、形状は畳と似ているが大きさも取り扱い方も異なっている。また、花火は、上げたり見たりするが、普通は咲くものとも散るものとも考えられない。前項の「花」は、その形状と美しさは保っているが、咲く・散るという現実世界での花のあり方は失っている。

ところで、これらの例は、前項と後項の意味関係を一般的に規定する際に材質と形という概念のみで行なうことができないことを示している。確かに、(10)の「人波」「水鏡」「石畳」「火花」を観察する限りでは、〈材質〉+〈形〉の順序になっている。しかし、「鏡餅」「畳鯛」「花火」では、逆に、〈形〉+〈材質〉の順序になっている。これらは、語順が複合語内部の意味関係で決まるのではないことを示している。

「火花」「花火」と同様に逆順が成り立つ「糸屑」「屑糸」を通して語順について身体性による一般化が成り立つことを確認しよう。どちらの語も〈糸であり屑であるもの〉を表わすようで区別がつきにくい。実際、「屑糸」の説明として〈くずになった糸。使い残りの糸くず〉と『岩波国語辞典』第四版は記している。後項が身体性を表わすのであれば、「糸屑」と呼ぶものは屑として扱われ、「屑糸」と呼ぶものは糸として扱われるはずである。次に示すインターネット上の記事からの引用例は、その区別が実際に存在することを示唆している。(11)の「糸屑」の用例は、糸屑が衣類やグラスに付着したり、ほこりのように飛んだりして、人が除去したがるものであることを表わしている。つまり、糸屑は糸がくずれてできた不要なものである。一方、(12)の例は、「屑糸」が屑とは言えまだ利用価値のあることを示している。

- (11) a. …ズボンの側面についた糸屑のような毛玉…
 b. 布巾から出る細かい糸屑がグラスに付着して…
 c. [眼病の症状]: 目の前に糸屑が飛んでいるようにみえる。
 d. 毛、糸屑などをとるのに、…
 e. [掃除機の広告]: 髪の毛、糸屑もサッと吸いとり…
- (12) a. タオル地で作った抱き人形。中身はスポンジと屑糸です。
 b. 真綿: 屑糸を原料にして繭を引き延ばして作った綿のことです。
 c. 屑糸・屑繭を国内で製糸するための模範施設…
 d. 絹の屑糸を濡れた状態で数か月間放置しておいたところ、糸の一部が青紫に変色していることを見出した。

(12)の例に比べると、(11)の糸屑は細かい塵のようなものという印象を受けるが、次の例は糸屑が大量にありうることを示している。

- (13) …繊維産業においても、繊維屑（糸屑、捨て耳など）などの廃棄物が大量に発生している。

したがって、ある物を「糸屑」と見なすか「屑糸」と見なすかは、量の問題ではなく、それを取り扱う人の態度の問題である。

心の中の世界では、ある物が〈糸〉とも〈屑〉とも認識され、この二つの意味が一つの物に重なり合って存在することがありうる。しかし、現実の世界、すなわち、身体を通して物と関わりを持つ世界では、どちらか一方の意味を選んで、それに従って物に対応しなければならない。そのとき選ばれた意味が複合語の後項となる。

ここまで観察した複合語は、後項の身体性によって現実世界の経験に結びつけられる例である。次の節では、後項の意味が身体性を失っている例群を見る。

3.2. 「海牛」タイプ：領域の変更

前節では、複合語には後項の身体性が受け継がれることを示した。しかし、この一般化は、複合語すべてに当てはまるのではない。これから見る一群の複合語においては、後項の表わす物が通常の領域から別の領域に移ることによって、その身体性が失われている。このタイプの複合語で、現実世界に直接関わるのは、後項ではなく前項が示す領域あるいは世界である。

このタイプの代表的な複合語としては、次のような海の生物の名前がある。

- (14) うみうし (海牛)、いそぎんちゃく (磯巾着)、はまぐり (浜栗)、うみゆり (海百合)、
うみねこ (海猫)

これらの複合語では、後項の身体性が複合語においても保持されているとは言い難い。たとえば、海牛は、生物学上、巻き貝の仲間で殻が退化したものだという。一方、牛はかつては田を耕し車を引くのに使われ、今でもその肉と乳を食用にしている大型の動物である。このような牛の扱い方の知識は、複合語「海牛」には受け継がれていない。「海牛」という名が付けられたのは、この軟体動物には角(触覚)があり、のろのろと動く姿が牛を思わせるからであろう。そうであれば、この複合語に後項が与えるのは、牛の扱い方ではなく、牛の姿と動きから受ける視覚的イメージである。

「磯巾着」「浜栗」「海百合」も、それぞれ巾着、栗、百合に形が似ていることによる命名であると思われる。「海猫」という鳥は、カモメ類で鳴き声が猫のようなのでその名があるという。海猫は、猫のように扱うことはできない。これらの呼び名を付ける動機は、生き物の姿や声のイメージであり、その扱い方ではない。したがって、ここでは後項の身体性が失われている。

陸に暮らす人が、海という別世界で出合った物に名前を付けるとき、それを日常世界の物に見立てて自らの知識の中に組み込もうとする。そのとき姿形あるいは声が似ていることに基づいて命名するが、別世界にある物であるために、名に付随する身体性が欠けている。そのことを明示するのが前項の「海」であり「磯」である。「海」は「牛」を別世界に引き込み、「牛」の身体性を消す働きをしている。言い換えれば、前項は後項の領域を変更したことを記す標識である。

海の生物以外にも、「野」「山」などの場所を前項にする命名はあるけれども、それらは(14)の前項としての「海」ほど極端に身体性を失わせる役割は果たしていないように思われる。海の生物を含めて、(15)に示すように「野」「山」「里」などの場所を前項とする命名は多い。

- (15) 野菊、野いちご、野ばら、野ねずみ； 山芋、山百合、山鳩、山猫； 里芋、里雪；
川魚、川せみ、川霧、川千鳥； 海亀、海へび、海ほおずき、海たなご

しかし、このような名は、身体性の全く異なる隣接類をつくることもあれば、下位類をつくることもある。複合語が表わす類が、後項の類の性質をどの程度残すのかは、それぞれの類に関する知識によって異なることである。野菊と菊の関係、川霧と霧の関係は、海牛と牛の関係ほどの相違はないであろう。また、「里雪」「川霧」「海亀」などの前項は、領域を変更するのではなく、場所による下位類を表わしているようである。

領域変更による身体性の消失が例外的な操作ではなく、一般的な概念化のひとつであることをうかがわせる事例を見よう。次の文章中の「法学部砂漠」と「高倉大学」は、「海牛」と同じタイプである。

- (16) a. 法学部の学生に不満が強い。最後の記述は、大教室での講義で、教官との個人的なつながりも、友人もできない「法学部砂漠」といわれる情景をにじませている。

朝日新聞1998年12月7日「東大の行方」3

- b. 二十年以上も前にお世話になった奄美大島のY公民館では、最近、公民館で老人の知恵を教える「高倉大学」を開いているという。この名は、昔、この地方の高倉式の倉庫の下の日陰で、皆が一休みしながら雑談をしていたことに由来するそうだ。

朝日新聞1999年3月3日「私空間」山内健治

「砂漠」は、具体的には乾燥した広大な荒れ地のことであるが、(16a)で「法学部」という領域に移されると、具体的な対象の意味が現実の場所に当てはまらず、不毛な土地にいるときの空しい気持ちだけが前面に出てくる。また、(16b)によれば、「高倉」の下の日陰に移った「大学」は〈知恵を教える〉という本質的な機能のみを複合語に与え、大学の組織や修業年限などは問題ではなくなる。この二つの例では、現実世界にある砂漠と大学に対する対応の仕方という意味での身体性が失われ、それに付随するイメージだけが複合語に生かされてる。

人は、ある物に関する印象を、それが在りえない別の領域の対象に対して感じることもある。そのとき、領域つまり世界を変更することを前項で表わし、その物の名を後項に置くことで、対象に名を与える。このタイプの複合語は、このような認識の過程を語形にとどめることによって、新たな物を既存の知識の中に組み込む働きをしている。

3.3. 「貝柱」タイプ：イメージの重合

ここでは、3.1節で例外とした「貝柱」「茶柱」類について考えよう。これらは、「海牛」タイプと同様に、「床柱」「火柱」とは対照的な認識のタイプを構成する。既に見たように、「床柱」「火柱」は、人が自らの身体と対応の仕方に基づいて、対象を柱の下位類または隣接類として認識することで成立する複合語である。それに対して、以下で論じる「貝柱」「茶柱」は、前項が表す物を基準にして、新たに物や位置を指定することで成立する複合語である。すなわち、「床柱」などは認識者を基準とするタイプであり、「貝柱」などは対象物を基準とするタイプである。

最初に「貝柱」における概念の構成について考えよう。この複合語は、その前項「貝」が対象を選び出し、後項「柱」がその一部分を指定することによって、全体として貝の一部分の名前となっている。その際起きているのは、二つのイメージの重ね合わせであり、これには後項「柱」における全体・部分の関係が関わっている。「柱」に関する知識として、〈家の屋根を支える〉ことがある。つまり、柱と家は部分と全体の関係を構成している。全体である家のイメージを、前項が表す二枚貝の殻のイメージに重ね合わせて、その二重写しのイメージの中で家の柱に相当する部分を「貝柱」と名付けている。したがって、この複合語を構成するとき、現実世界に直接関わるのは、前項の「貝」である。後項の「柱」は、家の形と共に貝のイメージの中に入り込み、その身体性を失っている。つまり、「貝柱」の後項としての「柱」は、人と空間を共有せず、人の身体との関係で決まる大きさも対応の仕方もある。前項の「貝」は人と同じ空間にある物として認められるが、後項の「柱」は「貝」が構成する内部空間に埋め込まれた家のイメージの一部である。

「茶柱」についても、同様の説明ができる。「茶」が表すのは、茶碗につがれた茶であり、そこに家のイメージを重ね合せれば、中に立って浮かぶ茶の茎が柱に見えてくる。それを「茶柱」と呼ぶことになる。茶柱が立つと良いことがあるというのは、複合語の中で柱の身体性が失われても、他の意味的性質はそのまま受け継がれることを示唆している。柱が立ち家ができることは良いことであるという思いが、「茶柱」にまで及んでいる。「霜柱」については、何を家と見なすか分かりにくい、霜が降りた地面が屋根となり、そこで表土を押し上げているように見える氷が柱となるのであろうと思われる。

このようなイメージの重合には、家と柱以外にも、身体とその部分の関係が用いられることがある。これは、家と体が、人が経験するもののうち基本的なものであるため、更に物を指定する際の基準としやすいからであろう。

- (17) 手首、足首、乳首； 目頭、膝頭、組頭； 川口、袖口、傷口、玄関口、秋口； 目尻、川尻、沼尻、湖尻、言葉尻； 山裾； 山肌

「手首」の場合、「手」が喚起する腕から手にかけての輪郭に、人間の上半身のイメージを重ねて、二重像の首のところを「手首」と呼ぶ。「山裾」の場合は、山の輪郭に和服姿の人の外形を重ねて、その裾にあたる部分を「山裾」と言う。(17)の他の例についても同様の認識過程が伴っているとされる。いずれの場合にも、現実にとの関係を決めるのは前項であり、後項のイメージを媒介にして前項が表わす物の一部分を指定している。

次の例でも、「先」「底」によって物の部分を指定している。

(18) 舌尖、指先、鼻先、筆先、矛先、旅先；鍋底、船底、靴底、川底、谷底

「先」の場合は、前項が表わす物のイメージに長い形状イメージを重ね合せ、その尖った部分を複合語で指定する。「底」は、前項が表わす物に入れ物のイメージを重ね、ものが溜まる部分を複合語で指定する。

「先」「底」で見た例では、全体と部分からなるイメージを用いているが、その他に「上」「下」「中」「前」「裏」「もと」などのように、後項が上下の広がり、または物の形や向きなどに依存して位置や物を指定することがある。このような指定の仕方は、和語に限らず、(20)のように漢語の組み合わせによることもある。

(19) 床上、床下、坂上、坂下、年上、年下、ガード下、軒下；靴下、ズボン下、手下；
川上、川下；町中、野中、人中、背中；駅前、正門前、人前、朝飯前、昼前、江戸前；
屋根裏、舞台裏、路地裏；足もと、手元、膝元、喉元、目許、口許、根元

(20) 東京郊外、自宅地下、利根川流域

以上の例に共通する点は、前項が物を指定することによって世界と関わり、後項がその物に基づいて部分や位置の指定を行なうことである。

3.4. 「胃袋」タイプ：イメージの重合による身体性の付与

さて、ここで3.1節で例外としたもう一つの語「胃袋」がどのタイプに入るのかという問題を取り上げよう。この複合語は、材質と形からなる「火柱」類と似ている点はあるけれども、この類には属さないと思われる。「胃袋」は、前項のみの「胃」が指すものと実質的に同じ対象を指し示することができる。自分の腹に手を当てて、「胃袋はこの辺りにある」とも、「胃はこの辺りにある」とも言うことができる。確かにこの点で、「胃袋」は、材質と形の組み合わせである「火柱」「人波」「石畳」「水鏡」「火花」の類に似ている。つまり、「胃袋」の場合と同様に、「火柱」が指すものを「火」と言っても一応同じものを指すことはできる。もし、「胃袋」をこの類に入れるならば、複合語「火柱」の構成を〈火でできている柱〉と見なすのと同じように、「胃袋」の構成を〈胃でできている袋〉と考えることになる。しかし、「火柱」類の前項である「火」「人」「石」などは形や数の定まらない実体を表わすのに対して、「胃袋」の前項「胃」には形があるという点が異なっている。この点は、「胃袋」を、材質と形の「紙袋」「布袋」「皮袋」と比べれば明らかになる。動物の皮を整形して縫い合わせれば皮袋はできるが、胃を同様に縫い合わせたものを「胃袋」と呼んでいるのではない。胃には前項になる段階で既に形が認められており、その胃を袋と見なして「胃袋」と呼んでいると考える方が実態に合っている。このように考えると、「胃袋」は、前項の役割に関して「火柱」とは別の類をなすことになる。

ここでは、複合語「胃袋」は、前項「胃」が現実世界のものを選び出し、その輪郭に後項が「袋」の形状のイメージを重ね合わせることで成立していると仮定しよう。前項の役割は「貝柱」タイプと同じであり、物を指定している。後項に関しては、「貝柱」では貝を基にしてその一部分を指定し、その際「柱」は現実世界から離れて形状のみを複合語に与えている。一方、「胃袋」の場合には、胃を基にして胃全体を袋と見なしている。その際、後項「袋」は身体性を複合語に与えている点で、「貝柱」の場合とは異なっている。もちろん「胃袋」に「袋」の身体性が全て与えられるのではないが、次の使用例では、胃袋は食物で満たすものであり、空になるものとして描かれ、袋の性質をある程度保っている。

- (21) a. 一律410円で……社員の胃袋を満たしています。
 b. 若いときは……胃袋に入った食物もエネルギーとして消費されます。
 c. ……赤ちゃんは3時間すると胃袋が空っぽになります。

それとは対照的に、単純形の「胃」は、消化・吸収するための器官として胃を語るときに用いられている。(22)の使用例はあるが、(23)のような例は見られない。

- (22) a. 胃がもたれる。
 b. 胃がキリキリと痛んだりする……。
 c. 正常な胃はぜん動運動が規則的で……。
 (23) a. ?胃袋がもたれる。
 b. ?胃袋が痛い。
 c. ?正常な胃袋はぜん動運動が規則的で……。

また、医学用語としての複合語や句においては、専ら「胃」が用いられ、「胃袋」は使われないようである。

- (24) 胃壁、胃酸、胃腸； 下垂胃、残胃； 胃のポリープ、胃と腸

これらの事実が示すことは、「胃」が体内にある消化・吸収するための器官であり、その調子の善し悪しを感じることがあるのに対して、「胃袋」は食物で満たす袋として認識されているということである。胃という物から写像された胃袋は、袋としての身体性を与えられている。

前項が「胃」のような多面的な意味を表わし、後項がそれに特定のイメージを重ね合わせて対応の仕方を具体化する複合語を「胃袋」タイプと呼ぶことにする。このタイプには、「目玉」「脳味噌」「膝小僧」が入ると思われ、以下で順に見ていく。

まず、「目玉」について考えよう。単純語「目」には、多様な意味がある。一つの語で、視力、視線、注目、注意力、目つきなどを表わし、次のような句を構成する。

- (25) 目がいい、目をそらす、目に留まる、目を奪う、目を細める

「目」に後項のイメージを重ねて「目玉」とすると、物としての眼球とその形状の意味に限定される。(26)の例は物質的眼球の例であり、(27)の複合語の前項では、「目玉」はそこから抽出された形状のイメージを複合語に与えている。

- (26) a. 魚屋さんでマグロの目玉だけを売っている光景を見た。
 b. その子は教師を直視できない。目玉がグリッと横を向くのだ。
 c. ここの料理は、目玉が飛び出るほど高い。
- (27) 目玉焼き、目玉クリップ、蝶の羽根の目玉模様

したがって、「目玉」は球状の物としての身体性が与えられているので、視力に関して「花子は目玉がいい」とは言わず、注意力に関して「太郎は花子の美しさに目玉を奪われた」と言うこともない。

「脳」と「脳みそ」の関係も「胃」と「胃袋」の関係に似ている。「みそ」は「脳」の働きや形や位置の意味の上に、日常取り扱える物質としての意味を重ねている。

- (28) 脳卒中、脳梗塞； 脳の病気、人間の脳の活動
- (29) a. ペーコンで巻いた子羊の脳みそ
 b. 寝過ぎると脳みそが腐るよ。
 c. 脳みそが足りない。

医学や研究の対象となるのは、脳であり、脳みそではない。したがって、「太郎が脳みそ卒中で倒れた」とは言わない。また、「脳みその活動を研究する」という表現は研究論文や教科書には相応しくないであろう。(29a)の「脳みそ」には、食べ物という点で「味噌」の性質が残っている。また、(29b-c)では、人間の脳という普段は手で触れることができないものを「味噌」という食品として概念化し、それが腐ると表現することで機能の劣化を表わし、それが足りないと言うことで能力不足を具象的に表現している。

「膝小僧」も、このタイプに入ると思われる。膝を抱えて座る姿勢は、膝小僧を抱えて座る姿勢と同じである。抱える対象として、膝が小僧であるように感じられるのは大人にとって日常の経験の延長上にある。

- (30) a. 両手で抱えた膝小僧に額をくっつけて目を閉じる。
 b. かかえた膝小僧と同じくらいの距離に子どもの顔があった頃、その子はしっかりと私をみつめ、力強くお乳を吸う。

膝を擦りむいたときにも「膝小僧を擦りむいた」というのは、「膝」も「膝小僧」も同じ具体物を指すので、「膝小僧」の使用範囲が広がったためなのかもしれない。

この節では、「胃袋」タイプを「火柱」タイプと「貝柱」タイプから独立した類として認めた。「胃袋」タイプでは、前項がある物を指定し、後項がその物とほぼ同じ広がりを持つイメージを重ね合わせる。前項のみでも同じ対象を指し示すことが出来るにもかかわらず、あえて複合化するのは、それによって物を具象化し、概念上取り扱いやすくするためである。

4. ま と め

本稿では複合名詞の成立に関わる物の認識の様式を分類した。第1の「床柱」「火柱」タイプでは、身体性に基づいて対象物が後項の表わす物の下位類あるいは隣接類と認識されている。第2の「海牛」タイプでは、前項が別世界を指定し、そこへ後項の表わす物を移し入れることによって、後項の身体性は失われるが、その物のイメージは複合形の中に保たれる。これは、イメージに基づく隣接類の命名である。第3の「貝柱」タイプは、前項の表わす物に後項の含意する物のイメージを重

ね合わせて部分や位置に名を与える。その際、後項は全体と部分の係に依存する場合と、上下などの広がりを手がかりにする場合がある。第4の「胃袋」タイプは、前項の表わす物に後項が更にイメージを重ね合わせることによって身体性を与え、その物を具体物として扱えるようにしている。第1類を二つに分けて構造に関して五つに分類し、動機を記すと次のようになる。

- (31) a. 「床柱」タイプ：性質の付加——身体性による下位類の命名
 b. 「火柱」タイプ：性質の変更——身体性による隣接類の命名
 c. 「海牛」タイプ：領域の変更——イメージによる隣接類の命名
 d. 「貝柱」タイプ：イメージの重合——物に基づく部分・位置の命名
 e. 「胃袋」タイプ：イメージの重合——物自体の具象化による命名

最後に、身体性という観点から5つのタイプを見渡してみよう。人が現実世界と関わりを持ち、そこに認める物を分類する手がかりとするのは、物の身体性すなわち扱い方・対応の仕方である。複合名詞による命名に際しても必ず身体性が関わっている。ある物に出合って、それを単純語で呼ぶとき、その物はその単純語で呼ばれる物の類に入れられる。しかし、その物がある類の下位類または隣接類と認めると、その認識を複合形で表現し、後項が元の物の身体性を、前項が区別するための際立った特徴を表わす。このようにして成立するのが「床柱」と「火柱」である。ところが、下位類・隣接類がすべて後項の身体性に基づいて設定されるわけではない。特殊な例として、後項の物のイメージに基づく命名がある。この場合、現実世界と関わるのは前項が明示する領域であり、後項が表わすのは身体性から抽出されたイメージである。この類は前項を標識とする有標の隣接類を表わすものと見なすことができ、その代表例が「海牛」である。

以上の例は下位類・隣接類を表わす場合であるが、複合名詞は、物に基づいて物の部分やその付近に名を付けるときにも用いられる。また、物に具体的な身体性を与えて扱い方を解釈するときにも用いられる。この二つの場合に基準となるのは前項である。前項の単純名詞はその身体性によって物を指定する。後項はその物を基準にして、物や位置を更に指定したり、その物に身体性を重ねたりする。このように複合に際して前項の身体性によって現実と関わるのが、「貝柱」と「胃袋」である。

人は、物に見出す性質によって物を分類し、物を基準にして部分や位置を指定する。人は、また、ある物を別のものとして捉え直す。このような過程を語形の中に記録して、物と物との関係の認識を支えているのが複合名詞である。

注

- 1 一次複合語(primary compounds)と二次複合語(secondary compounds)という用語は、竝木(1985: 79-80)の用法に従う。なお、複合語の下位区分と用語・訳語については、大石(1988)も参照。
- 2 日本語の複合名詞の分類については、たとえば、阪倉(1957 (=1997: 19), 1966: 423-428)、影山(1993: 193-194, 1997: 78)を参照。英語については、Jespersen(1961: 137-138)、Downing(1977: 828)、Selkirk(1982: 22-25)が、代表的な類は提示できるが、要素間の意味関係を分類することは十分にはできないことを指摘している。
- 3 基底構造から一次複合名詞を派生する可能性の研究については、Lees(1960)、Levi(1978)、奥津(1975)を参照。また、統語規則による派生に対する批判についてはDowning(1977)を参照。

- 4 基本レベル類とは、イメージと扱い方が一定で単純語によって表わされる物の類であり、知識の組織化に関して重要なレベルとされる。Lakoff (1987: 46-47)、Taylor (1989: 46-51) を参照。
- 5 日常言語の比喩(metaphor)に関する研究については、Lakoff and Johnson(1980)、Lakoff(1987)、山梨(1988, 1995) を参照。
- 6 ここで「隣接類」と呼ぶ概念は、Lakoff (1987) が複合形に関して subcategory と呼ぶものに対応するので、用語上の注意が必要である。本稿では、下位類(subcategory)は、元の類に性質を付加したものの、隣接類(adjacent category)は、性質の変更や逸脱のあるもののことである。文脈のテストによって確認する必要はあるが、例えば「鉄砲」と「水鉄砲」、「鉛筆」と「色鉛筆」、「時計」と「砂時計」なども類と隣接類の関係にあるであろう。
 なお、湯本(1978)は、複合語全体の意味が後項の意味から「わずかにずれている」例を分類している。
- 7 物の「身体性」とは、Lakoff (1987: 50-52) が物の「相互作用性(interactional property)」と呼ぶ概念と同じである。Lakoff によれば、基本レベル類の性質は、相互作用の性質である。すなわち、性質は物自体に存在するのではなく、人が物を扱う(interact)方法によって決まる。本稿で用いる「身体性」という概念は、そこから抽出された視覚的・聴覚的イメージと対立する。
- 8 ここで視覚的イメージと呼ぶものは、Langacker (1987: 110, 135-137) が 知覚・視覚・聴覚イメージ(sensory imagery, visual imagery, auditory imagery)と呼ぶものに近いと思われる。Langacker によれば、この意味でのイメージは、感覚器官からの入力がなくても生じる知覚のことである。例えば、目を閉じていて思い浮かべた光景や、何も聞こえない所で思い起こした犬の吠え声や、この種のイメージにあたる。
- 9 ここでは、形状が身体性から抽出された概念であると考えた。このような概念の抽出は、英語の動作動詞が移動をも表わす事実においても観察される。
 英語の移動動詞は、従来、動作と移動を合成する分析がとられていたが、逆に、動作から移動を抽出する仮説の方がより一般性の高い説明ができることについては、嶋田(1998)を参照。
- 10 篠木(1996b: 69-70)は、「モチ肌」「モチドドメ」(美味しい桑の実(群馬県方言))「餅松露」などの前項「餅」では、造り方や食べ方の知識ではなく、「モチの実感が語られている」ことに注目している。造り方や食べ方の知識と「実感」の区別は、本稿における身体性と形状イメージの区別に通じる。

参考文献

- Downing, Pamela 1977 "On the Creation and Use of English Compound Nouns." *Language* 53. 4: 810-842.
- Jespersen, Otto 1961 *A Modern English Grammar on Historical Principles, Part VI Morphology*. London: George Allen & Unwin Ltd, Copenhagen: Ejnar Munksgaard.
- 影山太郎 1993 『文法と語形成』ひつじ書房。
- _____ 1997 「形態論とレキシコン」西光義弘(編)『日英語対照による英語学概論』第2章 47-96. くろしお出版。
- Lakoff, George 1987 *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson 1980 *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of

- Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1987 *Foundations of Cognitive Grammar, Volume I : Theoretical Prerequisites*. Stanford : Stanford University Press.
- Lees, Robert B. 1960 *The Grammar of English Nominalizations*. IJAL26 : 3, Part II. Bloomington : Indiana University.
- Levi, Judith N. 1978 *The Syntax and Semantics of Complex Nominals*. New York : Academic Press, Inc.
- 竝木崇康 1985 『語形成』大修館書店。
- 大石強 1988 『形態論』開拓社。
- 奥津敬一郎 1975 「複合名詞の生成文法」『国語学』101 : (19)-(34) 斎藤・石井(編) (1997 : 158-175) に再録。
- 斎藤倫明・石井正彦(編) 1997 『日本語研究資料集 第1期第13巻 語構成』ひつじ書房。
- 阪倉篤義 1957 「語構成序説」『日本文法講座I 総論』明治書院 斎藤・石井(編) (1997 : 7-23) に再録。
- _____ 1966 『語構成の研究』角川書店。
- Selkirk, Elisabeth O. 1982 *The Syntax of Words*. Cambridge MA : The MIT Press.
- 嶋田裕司 1998 「移動表現：心的映像と抽出理論」『群馬県立女子大学紀要』第19号 (63)-(75)。
- 篠木れい子 1996a 「ヤキモチをめぐって——生活語彙と生活文化史——」中條修(編)『論集 言葉と教育』127-143. 和泉書院。
- _____ 1996b 「食語彙を読む」『言語』25-11 : 64-71. 大修館書店。
- _____ 1997 「造語の場・時と語構造」群馬県立女子大学 『方言語彙論の方法』和泉書院(近刊)に掲載予定。
- Taylor, John R. 1989 *Linguistic Categorization : Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford : Oxford University Press.
- 山梨正明 1988 『比喩と理解』東京大学出版会。
- _____ 1995 『認知文法論』ひつじ書房。
- 湯本昭南 1978 「あわせ名詞の意味記述をめぐって」松本泰丈(編)『日本語研究の方法』75-93. むぎ書房 斎藤・石井(編) (1997 : 176-191) に再録。